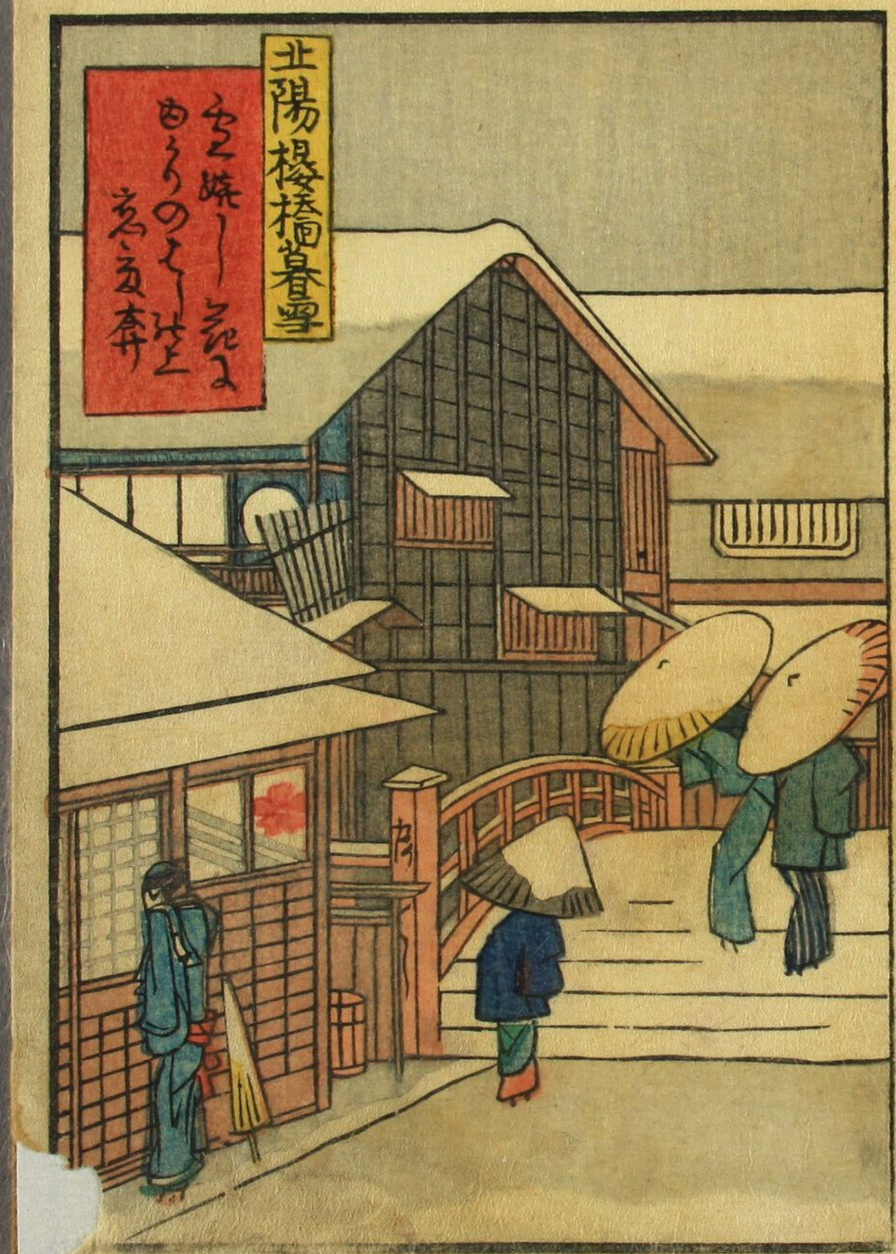
梅廼栞
第三編
五之卷
摂州灘岡本梅林
五劇当梓


北陽樓橋暮雪

冥ひつゝみたる時いつとてぬしは
性なるたうりを言ひきんは　花宣

他人の内かうどのかとあるや　上田
実の身うちに氣兼する　馬森

主も何中ら苦がなると嘆や
ゑこし一人じやるひかなる　素遊

こがれさと知ぬ人迄れぬらぐこ
梅とぐへくぬし　かどみ　校重

足へ出う稲そくツイいひうほそく
おろりと帰こもひとしぐ　梅荘

氣休んなりとも説くこうりや
きこしや苦ろうも是程に　各雅

稲かゝるうらこの数も
こほ見りやそんなかいたもい　二　繰

くひ言訳としても　この様子
紅の歯がさぶ法のてある　京　義里

男稲とろて我ものらしく
アノ旅なるくのつかにくさ　深　世

おかへてゐるんせまや　一　巴
蘂小房してをしこしく

道の深森にうちとけうほて　桃枝
のろけてさぐろこぬしの実

アノ堅ほにこのふく後びと　琴汀
鍵ざ見じゆとまにひ打

花立おもひと龍にも出さぐ　二　餘
うましるがうもまきこふり

掃にせるつてゆいはぬがち　吟香
るのこぐもろひといふこうて

そ道なかぞに尾こくうまく　遊照
それからおなあとるそじめ

他人のなつごの情と実ごの
いゆるは此苦手なるふとは　玉旭

雲にかくれひ龍見えひとて
ゆかれしてから春に翌と　柳枝

末ごのしこにのろ此禱も
ゆくこのころのその氣では　紫光

見ゆとゆ見ている身とあれは
まごつとめ氣とさくる氣の　八尾芳香

俗にある身とそのかくてぐち
そりやこの歪ろ道に道や　好々

無理と思ふは唯一病さも
なひとて此無理皆ながら　琴絲

志げく出る歌のへりもなかて
モフ 性根をへつ起るなれど　餞一

初なりや立氣路に添ひてまづ
ならぬそしらぬ仲人の手前なれば　意波

園のさゝしきゝイをもひぐし
かりして寝る夜も過るなめ　七丈

そんな氣味いきさんされど
こしや志つて居るう社人と　竹松

冥ひえひ男をいひつのらんを
うらこもいきれぬうましさを　柳枝

通知やうらこをゝイら逢しきに
いふなりきひたりのみけたり　遊照

氣ろのうね他あめをる氣ぐる
しさ口ゝ何の人とよそれにして　紫光

明さ日さへ無さぐる世うな氣
づよひ御ゆ人の氣ひをなし　二條

龍見りやまげなやさ史法で
うしゝ法さりのうけさり　桂香

佳が明さう火の揚ふなって
モフ世けの無茶な恨ゝ雪　遊照

いつそ昔ろうところうつうえ
主もうる氣をせねかりに　意波

人をおもふそうれひそこ尾と
このたれ眼ぶこわつまこ毛と　松壽

ぬぐふしてアノ世うにこの髪ゆゑと
一の笑かつこも 由う辺まで　梅枝

龍りや今さら笑龍がでるよ
うらこもコチ是に云ぐ居て　名雅

なんの志是う志ひがやもこの
いつまでこよりが無ひかとて　長呆

去ば時刻をこのちるさめぞ
わんに今朝ぶけ気が由りこ　一巴

遂こまうとて気づこひ事を
いふてかへはもぬしのこ免　梅菁

ぬれて嬈し見今青紫尾を
志つわりこころもちるの何免　白戸　由この

笑ぶほふ直して牛とでるものゝ　上田　馬勢
まれて服ぶことどかなろう

ふとうとうとうふと人に
見せたいくろうとうとうにぶけ　和秀

のろけまづ巳その高座ゆゑ
気味ゆるへわどあ夜さも　可満

それ程ゆゑ君やひ臣もせうが
やうこの尾を極てうら　二陳

待て居る是ぐ寝ていふりやせぐ
ドカとて呼かも往りやせぐ　遊照

まぐ見弟さへのの人ゆえか
やうりふへことちうごろを　紫光

はらさうまれて娘ぐおこよ
なんな 種気も使りかと　梅本

気づかれたのうふやうが中と
まとしやのうけも聖ことが　敬舟

うれしござんは今青の田見に
翌もこうして解さん事　東雲

何れサふくひと気とも夏さんは　白戸
まもてそれうらこふひが屋　西こう

店のおとこに多度ひきり紙
そこ尾の邦ともおとけとも　梅喜

おまおの龍りやツイ恵るのに
いやしくまりの蜀老ぐやのと　笑照

あらぬ明ぶめつけても見て事
さうでもあのかとおもふより　柳枝

苦労ぢうりでもこしの実が
たしぬをおゆ人の深気から　意波

喜多に変を志りよと出る三味
後も志めりがちなる和子　東雲

ぬしに似て換なアノ三日月ハ
宵に龍ぐけ見てぢうり　琴脇

困って居さんせう形とあるが
さうでうあさうろおまへ事を　遊熙

居や家をもとどめでもなるを
何とをおゆ人のむ祐ひとつ　上田　むら丸

来るとおもひよりに待てくらびまて
氣くらびれたる遠まつでは　錢一

とめに升りが実でもなひと
素直にこゝろもぬしのさゝえん　一錬

浮氣ごけでもまやかのしこう
氣くらしたる苦がおほひ　意波

一人だうりが身のこのしこうで
どこが苦がゐのくまりかう　梅本

絶ね苦るうも忘れたおもひ
まるも遠さうのたゝえんで　多粧

まれとこひたしツイ恥うして
辛氣にもまゝ金沢のなり　意蔓

人がいかなるいろしてあきな
ようしやうにしで立ち寄る路　口戸　遊

靜かなるくびど人服がなくば
こちひ殊ゆひこがれまへ　清玉

そんな氣体めるにしにいかて
こなびつくりをさしのうえ　茶　英里

実を見しこアノ行ぬしん
なのきが来ることて見捨てきま　雲暁

まろこ一云ひとてく氣ゆきをあが
廣のこ稀ゆらくまりゆら　谷舟

氣づかなんごとゆち服をとも
アノ鶏うきをきくまでも　琴来

翌てゝやうとなきを今宵へこよの
名つくるかはしがこの今さうよの　梅光

雨もふろうとなんじもさうさと
いつかなのゆうなそ尾使り　糸稼

歌るんかはくとてそりや帰で
なろ鶯奥がさうかに逢さしに　九化

逢さい稲がひごのなかて已して
ほうれせね掻かなるなかれば　清玉

けちとかまやうひとて何かのるに
気がつきやとひと訓ありや　上田 迂船

焼しさ先じめの此居つぎに
主てなんごかふさぎつゑ　素游

一生涙氣で人にはなるし
そんなにや喰らし世にんへも　枝重

狗さら化粧に色やまぶ付ね
今宵のそ尾とは咲るぶら　秀雅

化人にや美ぶ身でかつれさせねと
ひひ消しくしてうでは　梅光

景明らも死ね氣にかけても
見たりのやくかつぶり涙さ家が　八尾　青貫

樂評
花評　追加之部

去ひ子と氣をまりつとめて
居るにせろまさは去ひとは　蘿松

吐し吐きて魚んどもうほく　上田　鳶壱

癖てもうやとて止れ下ね

是でもまぐ生や氣や入ぬうと

しん氣も髮やでおのふ撰ふ　姉笑

なんのう社とてアノ他人さん

まさしむりうこまずでに　志游

かまてゐん果といまれくゐても

まさしや果ゐうところでも　枝重

まさしが追さらう大かさぬしも

アノ旅多稼とそふ氣也　浮世

をしも放まぬんとして

なぜ来おしまよ此ぬしも　梅牛

此の遊ぬ日もるさやまする日と
おのやうれしひ女房氣で　知音

明しる遊せバモフさ見ぐりの
うれしるのぶも出ぬ平り　古遊

見さしの遊のこ感わど古ひ
一るるわどあさ遊の家に　和音

人にも明せぬ種の続うけて
しゆるか此の所にあつことを　雅楷

夜ゆるのを此にあげへるを
こがれさ何ありを傷にして　漏々

おくひを私と勝るなぬしら
抗勝手をこのえさんは　餞一

眉毛落しこその歯坐でも
かくされもせぬたづら　しく　　哥唱

無理な袖がひらゝ袖さんこのこ
そしておまへ無りを起く　　乃雅

あらふてくれるなら私や嫌いか
とんとおまへと稲あれを男　　光鈴

しげるのくさんぬがあるなら私や
無理どもしてきたきたもなぬ　　梅遠

昭ゝもるのこゞもうるつかや龍へ
出せばくるしむ稲のうち　　梅二荘

痕をとしたれうつく痛いかや
やうて夏ゆ来てつのら甘草　　梅玉

来のさかづきしてうれくも
見たがたゞあたはぬしの良 一止

浮くも咲のされ気をつくしんで
えんがほで気どりをするつぶき 花井

浮くりみよとうしや知りつくも
いイ男ん気らしひと云も 桃枝

ぶいかりとしてき桃さ見や
形ゆるさ浮ふ来やさんせ 七化

脊をゆくふ一生のもなし
いろもそぶろなそ尾をして 花雪

○

機がんとろとて来さんはふき
よそでき がんのうるひ男を 梅陰

昔ゞのまゐれと又氣苦勞を
さはとも女房にあつことを

夏起
大畫

追加

こゝろもちれしさ[illegible]とてとのうし
此そこ尾を[illegible]て氣[illegible]ぬし

吾

惡[illegible]人[illegible]

一荷堂半[illegible]集深
歌川 國貞画[illegible]
宇[illegible]荷梅乃葉
小冊五[illegible]

[illegible]

夏熊二寅初夏
今橋武丁目
浪
華
[illegible]